

2018S セメスター キャンパスアジアプログラム 報告書

法学部 3 年

2018 年 S セメスターに北京大学へと留学した。留学に当たり悩むことも多かったが、多くの方のご支援もあり、充実した 3 か月半であったといえる。本報告書は、報告書というよりは、なぜ北京大学への留学を志したのかという点から初めて、基本的に中国での滞在期間中にしたことを網羅的に述べていく単純な記録、回顧録的体裁である。最後に再び来学期も留学の機会を得たことから、来学期に向けての現時点での計画や思いについて述べる。より深い感想や総括は、1 年が終わったのちの報告書に譲りたい。

志望理由

大学入学以降、インドで教育支援活動を行う一方、東アジア 5 大学の学生が集まる学生会議に参加したり、国際法模擬裁判に参加したりするなど、世界へ視点を広げようと努めてきた。このような経験を経て他の価値観や文化に触れる意義や楽しさを実感した。

そして日本（地域）と海外を多面的に繋いだりすることへの想いを持っている。そのためにもコミュニティ形成の在り方、ガバナンスの在り方がどのようなものであり、どうすべきかについて分野横断的に考えている。

また、長期的な関心として中東まで含めたアジアが世界の中でどのように構想されうるかということ、考えたく、そしてそれを形作ることに携わりたいと思う。

以上のような問題意識、非常に漠然としているが将来に対する展望の下で、私は留学を志したが、取り分け中国への留学を決めた。

先ず、若いうちに中国で実際に学び、生活することで、内面からその大国とそこで暮らす人々を理解していきたいと考えた。そもそも 2012 年前後の日中関係の冷え込みを目撃した際高校生であった私は、中国政治経済・日中関係に関心を持ち、それ以来自分には何が出来るのか考えてきた。そして中国で学び・暮らす経験は、東アジア・アジアの将来を考えるうえで中国を無視することがその経済的規模・地政学的重要性から不可能であるといえる今日、自分が国際社会を生きるにあたって必ずや資するものである。そしてその経験は、現地の大学で国際関係や政治学の分野を中国の視点から学ぶこと、実際の市井の暮らしや中国人のキャンパスメイトらとの接点を経て得られるものである。

加えて、中国は現在 IT や E コマース、シェアリングエコノミーなどの新分野で頭角を現してきており、等身大の中国を見ていきたい。日本国内でも中国人観光客の増加という流動的な人的交流の活発化を超えて、近年では定住中国人の増加が堅調にみられ、中国企業によ

る日本企業買収や、日本市場進出も頻繁に行われるようになった。かつて安かろう悪かろうの代名詞であった中国産品、中国企業の姿はそこにはない。

これに並行して、「一帯一路」という切り口に対して、留学の経験を活かし、その国際戦略を中国国内から見つめてみたいと考えた。人権の軽視、投資プロセスの不透明性、中国企業の優遇、小国がとても負担できない額の債務要求等々、一帯一路構想の核心と、それに付随したプロジェクトに対する批判は枚挙に暇がない。その中で、ここまでの大戦略を単独で構想できるたのはアメリカを除き中国しか存在しない。疎に事実に対し、いったん色眼鏡を外し、中国視点で何を構想しているのか、中国人はそれをどう思うのか、冷静に分析したいと考えた。

また、欧米由来の民主主義に対して中国の統治体制は特殊である。この統治体制や、個人的に関心があるインターネットが発達する中での国家と市民の関りについても思索を深めたく思う。

中国で暮らす中国人は、2期目となった習近平体制の下で、何を想うのか。現体制の下で、学問はどう営まれていくのか。留学の経験を活かし、行動し、考えていくこととした。

講義

交換留学というのは一義的には留学先の大学で学ぶことであるから、北京大において受講した4つの講義についてまずは述べていきたい。

北京大は、英語に近年力を入れており、様々な国からの留学生を積極的に受け入れてこそいるが、実態としては、東大もまだその範疇にあるように、基本的には中国人だけで完結する大学であると言える。従って、大半の講義は中国語でなされ、北京大の学生も基本的には中国語の講義しかとらない。従って北京大に留学した以上は中国語で講義を取るのが筋というものだが、専ら私自身の言語能力の限界により、英語の講義のみを受講した。

私が所属した元培学院はいわば教養学部であり、全ての学部の講義を取ることが出来る。その中で私は中華人民共和国建国後の中国について学びを深める、ということを軸に据えた。そして経済、歴史、国際関係から一つずつ講義を選んだ。同時に中国を知ることからは離れ、アメリカ人の講師が担当する英米法の講義を受講した。法学部に所属する身として北京大の法学徒がどのようなレベルであり、そのような経験をしているのか知りたかったからである。

以下4つの講義につき簡潔に内容と所感を述べていく。

・本土視野下的中国外交与国際事務/国際关系学院

中米関係等に精通している教授が、毎週何等かのトピックについて中国と関わらせて講義していく。最初の1コマは各回担当者のプレゼントディスカッション、後半2コマは教授による講義に充てられる。

テーマは中米関係、一帯一路といった現在の国際関係の焦点ともいべきトピックに加え、G20 や気候変動といっ中国が影響力を増してきている分野にも渡り幅広い。毎週最低 70 頁程度のその週のテーマに関する論文を読んでくることが求められた。この講義においては、受講者に中国人の学生がいないこともありディスカッションや講義は必ずしも純粋に中国視点ではなかったが、それでも様々な国際関係のトピックにつき、中国がどういう戦略をとり、どういう方向へ舵を取ろうとしているのか毎週考えていくことは頭にやすりをかけるようであった。というのも日本から見ると常に日本の国益に対する中国の行動という思考回路となり、中国以外の学者が書いた論文にも同じ構造が見られる中で、純粋に中国の国益というものに従った国際社会での行動というものを分析する機会は得難いからである。ただ福建省出身だという教授の英語には非常に強いアクセントがあり、聞き取りに苦労した。この教授の講義を中国語で受けたことがある中国人の友人に聞くと、中国語でも時折何を話されているのか分からないそうである。この講義においては一帯一路についても扱い大変興味深かったがそれについては後述する。

・中国商务/光华管理学院

中国経済や中国企業の動向に詳しい教授が、中国経済成長の秘訣や中国経済の今日の状況について講義していく。後半ではグループレポートとプレゼンテーションが課される。

講義は基本的に教授が 3 コマ話し続ける。中国がどのように経済成長を遂げたか、マクロ的に分析していく。同時にその時期に中国企業がどのような戦略を取り、イノベーションを起こし、今日に至っているか考えていった。最後に一帯一路、(この数か月、所謂中米貿易戦争で鳴りを潜めたが)中国製造業 2025 計画、2030 年までの小康社会の実現など、新たな段階に入った中国経済、中国企業の今後について述べた。また、HBS で用いられたハイアールの戦略についてのケーススタディについて分析を加えたグループレポートと、中国市場に関わるケースを一つ取り上げグループプレゼンをすることが求められた。私のグループは、カナダ人・中国人と一緒にあったが、ケンタッキーフライドチキンがどのようにローカル化を進め中国市場に浸透していったかについて取り上げた。

残念な点は教授の英語レベルが限られており、情報の密度が低いように感じられたことである。また扱うトピックも後半に渡りはしたが深みにかけた点は否めない。しかしながら議論のポイントは抑えられ、講義から得たポイントをもとに各種論文や記事にあたって行けたことは大きな収穫となった。

・中欧关系史/歴史学院

中国と欧州の冷戦期の関係史について研究を行うイタリア出身の教授が担当した。主目的は西側陣営と東側陣営に 2 分された冷戦期の世界の中で、中国はどのように外交を展開し、国際秩序に影響を及ぼしてきたかを検討することを通じ、冷戦をより複層的に理解する

とともに、今日一帯一路でさらなる深まりを見せる中欧関係の姿を考えることである。

中国人学生はおらずアメリカ、カナダ、ロシア、フランス・ドイツ等の学生から構成され、さながら中国の大学ではないような雰囲気であった。中国の現代史の知識をほぼ全く持ち合わせていない学生もいたことから、20世紀中国の基層になる19世紀からの列強の侵略を受け続けた中国の歴史について大枠を学び、その後、ソ連・東欧・イギリス。フランスといった主要国からパチカンまで、欧州各国との冷戦時代の歴史について学んだ。講義は教授の概説とともに、仮定のケースに基づくディベートがなされた。私は「ソ連が1956年のポズナニ騒動に軍事的介入が行われたとして、その直後に持たれた、中国とソ連代表の、その介入の正当性をめぐる議論」と「1980年代に東独のホーネッカーがゴルバチョフの指導に従い自国でも政治・経済改革を行っていたら、後の東独崩壊は防げたか」というテーマについて、それぞれソ連側・東独の崩壊は不可避であったという立場を担当した。また中間と期末は3時間、一つのテーマについて論じる、という歴史学部らしいスタイルの試験であった。

講義の内容は日本ではほとんど扱われることのない中国と欧州の冷戦期の関係であり、確かに世界史全体から見ると、大きな影響はなかったともいえるのだが、この関係史を通じ、2大大国の狭間で、ソ連とは距離を置く社会主義陣営として中国がどのように外交を展開したか、欧州は冷戦期に中国をどのように見つめていたか知りえた。講義後半では民主主義や人権といった基本的価値観を異にする欧州と中国が、現在そのような関係にあり、今後どのように関係を発展させていくべきかについての議論に焦点が移り、期末試験の唯一の問いは「現在の中欧関係について分析し、今後の中欧関係について考えを述べよ」という一文であった。

また途中、招待されたドイツ人の教授は中国の現状の態度は受け入れ難いとする一方、担当のイタリア人教授は中国の在り方を認めてそれぞれ干渉したり、過剰に恐れしたりすることなく関係を深化させる必要があるとして真っ向から対立し、議論が白熱したことは、欧州目線で見ると中国との関係の複雑さを実感させた。

総じてあまり日本では触れられない冷戦期の中欧関係につき知見を深められたということはおもに、ユーラシア大陸を繋ぐということを当初の軸に据えた一帯一路構想と、トランプ政権下での米国の影響力の停滞の中で、この二つの地域についてより深く分析し、双方の立場から今後の姿について思索を深められた。このことは一帯一路をはじめ中国の国際戦略をより幅広くとらえられることに繋がる。

・ 专业英语/法学院

アメリカ出身の教授がアメリカ契約法について、アメリカのロースクールで取り入れられるケースメソッドを用い講義を行った。毎週40頁、5ケースほどが扱われた。

講義は所謂ソクラテスメソッドで進められ、判決に対して「なぜ」を問い、似たケースを比較し、アメリカ契約法の在り方を明らかにしていく。約因法理や損害賠償の在り方など英

米法に特有の考え方について一通り網羅していった。ケースの分析を行うレポートの提出を2回求められた。

この講義は30人中若干名を除き全員法学院の中国人学生であった。講義内での発言を求められるのだが、発言や質問が止むことは無かった。またあくまでこの講義に限ってのことではあるが、30人中20人以上は女子学生と見受けられ、日本との男女比率の差が際立っていた。同時に周囲の学生は中国法との比較で英米法を見つめており、日本民法との比較で考えていた私とは差があり、その点も刺激的であった。中国と関係のない講義であり、東大法学部でも英語の英米法の講義はあるのだが、北京大の英語に堪能な、恐らく海外志向も総じて高いであろう優秀な学生の姿を間近で見られたことは、今後東大に戻った後も大きな勉学の動機となり得ると思われる。

・その他

日本語初級

5回以上第二外国語として日本語を学ぶクラスに参加していた。ひとつに日本医関心のある学生と知り合いたかったこと、また日本語の中国語話者に対する説明に仕方を学ぶことで、日本語と中国語の間にある違いを学ぶことである。実際、講義内のグループ発表に参加し(私は中国語を使った)、非常に仲のいい友人が出来た。同時に中国語の勉強ともなった。

講演・大学院生向け講義

北京大では、ほぼ毎日どこかしらで、種々のテーマの講演やシンポジウムが頻繁に開催されていた(因みに私は会えなかったが習近平が北京大120周年を祝いキャンパスを訪れもした)。英語と中国語が半々くらいであり、私は時間があればなるべく赴いていた。「華人の歴史」「香港人のアイデンティティ」等々中国に関わる非常に興味深いテーマから「内線とは何か」「トルコと日本の明治期の関係」など海外大学の著名な教授の研究まで、幅広い分野について話を聞く貴重な機会を得た。東大もしばしば学内外問わず講演が開かれているが、北京大に比べればその頻度も、テーマの範囲も限られていると言わざるを得ない。

また中国の地中海との国際関係に関する大学院生向けの講義に顔を出していた。基本的に講義と若干のディスカッションであるが、毎回それぞれのテーマに詳しい講演者訪れ、中国が今後中東・地中海でも影響力を増していくであろう中で、多角的に知見を得られたことは更に視野を広げることに繋がった。

・総括

講義の予習のために、中国人が執筆者のものを含む数多くの英語論文を読みこみ、講義も基本的に全て中国に関わっていたのであるから、留学先の国自体を知的探求の対照として選んだ身としては、本望であった。ただ講義は必ずしも奥深くまで切り込むものではなかったともいえるのが少し残念であった。しかし上記のように多くのことを

学びえたとしても 4つしか講義を取っていないのは、(リーディング課題は膨大であったが)欧米系の大学の講義スタイルとは異なる以上少ないのかもしれない。それは 3で示すように現地で暮らすという経験を十二分に活かしたかったからである。

課外での活動・日常生活

2018 年の北京で暮らすということ

ある 1980 年代に留学した自動車関連業の方は、自転車で埋め尽くされた通りを回顧し、2008 年より前から暮らしている医療関係者の方は、オリンピックへ向けて日に日に道路が整備され道端から露天商が消えていった、激動の変化を振り返る。そして 2008 年の北京オリンピックから 10 年が経ち、地下鉄の延伸や郊外の開発は活発であるが、都市の変化は既に一服したというべき状況である。

しかし新たな質的発展には勢いがある。あらゆる分野へ広がるシェアリングエコノミー、E コマース、QR 決済が急速に普及し、中関村を中心とした新興企業の興隆がする様は、道端によく唾が吐かれ、北京駅には地方からの出稼ぎ労働者が集まるなかで、少し滑稽でさえある。そのうねりの中に暮らす。

北京で暮らすために何を準備すべきか。測定値を振り切れるほどの大気汚染への対策より前に、若者としては微信がないと始まらない。友人との遣り取り、支払い等々生活の大半をこれに頼る。同じ機能をもつ支付宝で補完し、QQ, 微博, 百度, 高德地图, 饿了么/美团/大众点评, 今日头条, ofo/Mobike, 优酷と次々とダウンロードして行くと、グーグルもツイッターもない中国の外とはまるで異なるネット環境の中へ入っていき、ようやく北京人の生活目線に合ってきたような感覚となる。表面的かもしれないが、中国では 95 後と言われる世代に囲まれて生きる中で、これが現代版の、中国の現地生活に適応する過程なのかもしれない。

2012 年に冷え込んだ日中関係は緩やかな回復をしてきている。しかしその外交的側面をはるかに超えるスピードで人々の対日観というのは良好さを増している。日本が中国と戦争をしたという事実を忘れたわけでもなく、毎晩多くのテレビ局が抗日ドラマを放送する中で、驚くべき変化であろう。膨大な数の留学生が日本を訪れ、そしてインターンを仲介する学生向け HP(日本で言うマイナビ・リクナビ)では、多くの企業で日本進出のための準備をしていることが伺える。日本の市井では中国に対する漠然とした嫌悪感がはびこる中で、中国から日本への視線や知ろうとする意欲は熱い。

しかしその日本人の中にある漠然とした嫌悪感の一端は、事実上の共産党一党独裁のもとで、ネットの制限や人権抑圧が確かに行われていることであろう。身分証、顔認証、ネット検閲で常に国民の生活は監視され、戸籍は旧態依然であり、どのように弁護を試みようとも、政治的自由も完全な経済的自由はないと言わざるを得ない。取り分け 2012 年以來の習

近平体制でこの流れは加速し、街中に「習近平とともに中国の特色ある社会主義を実現していく」といった、半ば個人崇拜に近いスローガンが掲げられる。憲法改正による国家主席の人気の撤廃という象徴的事象に始まり、あるネットメディアが規制を受け、北京大学の教授が政権批判とともれる文書を発表したことで辞任した。このようなことを上げれば枚挙に暇がない。

ただ、学生の多くは習近平体制に批判的であり、上記のようなスローガンに陶醉しているなどということは全くない。

すこし焦点はずれるが、北京大学 120 周年の前後に、20 年前の女子学生の自殺事件に関する告発が北京大学を揺るがした。20 年前ある女子学生が北京大学の教授からセクハラを受け、それ苦として自殺したということを知った OG である当時の同級生が再告発し、今の北京大学の学生がネットメディアを使って大学当局に資料開示等を求めた。これに対して北京大学はこの資料開示請求を行った女子学生を、秩序を乱す行為に従事しているとして夜半に寮から連れ出し謹慎処分とした。この一件に対して、SNS 上ではこの女子学生が出した声明文が多くシェアされや大学批判がなされた。無論 120 周年を汚すための策略であるとか、女子学生側に非がある等、別の意見を持つ学生もいた。結局この一件は特に、大学側に変化を齎したり、学生側の実際の運動に繋がるということは無かった。ここが今の学生の限界であるのかもしれない。ただ社会不正を容認したり看過したりしているわけではなく、政権の失策に対しても不満を持ち、批判を行う。ただそれは記事の削除や情報の統制の中でのものではある。結局大半の中国人は、VPN というファイアウォールの抜け道を使ってまで海外メディアを消費しようとはしないし、海外メディアは中国の「些細な」一件に対して詳細に情報をくれるわけではない。

しかしながら、学生の中でも一定数が、先の憲法改正も体制の安定化に寄与すると肯定的であったり、プロパガンダにうんざりしつつも現状の生活自体に不満を抱いているわけではなかったりしており、大きな国家体制が下から揺らいでいく気配はない。私がいる間にもトラックドライバーや退役軍人などにより抗議活動が繰り広げられた。しかしそれらもまた、ネットが規制され、共産党の事実上の一党独裁体制であるという、大きな現状を変更するものからは程遠い。

北京大学で学び多くの学友を得たが、彼らはあと 10 年もすれば中国社会のあちこちで地位を得はじめ、やがて指導的立場になるであろう。その時にも同じ体制が続くということは想像しがたくはあったが、むしろ別の姿も描けはしなかった。

クラブ活動

北京大学ではクラブ活動は東大はじめ日本よりも盛んではない。スポーツが活発でないのと勉学へ注力していることが理由として言われる。しかしながらそれでも 3 月末には東大ほどではないがサークル新歓のテント列が設置され数十のサークルが軒を

連ねる。その中でいくつかのサークルに参加してみた。

・反貧困協会

名前の通り貧困・格差問題に関心と高い、社会学員を中心とする学生が社会調査、ボランティア活動、勉強会を行う。ある時私は地方からの出稼ぎ労働者が集まる北京のある地区にある私立小学校を訪問した。公立学校の方がむしろ高く、親の収入では学費負担が重すぎるため集まっている子供らは、戸籍の問題から12歳で北京を離れなければならないという。その地区は明らかに発展から取り残されており、中国が未だ根強く抱える貧困問題の一端を見ることが出来た。

また、反貧困協会は(中国国内でこの表現を使うのも不思議ではあるが)、左派的でリベラルであり、政府の抱える問題等にも敏感に反応し、ウィチャットで頻繁に議論がなされていた。ただそれが遠因してかウィチャットのグループを一回閉鎖し新しく作り替えた。いずれにせよ、中国国内にも、貧困問題や政府の政策の失敗を含む社会問題に切り込んでいこうとする学生がいることは事実であり、比較的豊かな家庭で育ってきたであろう北京大の学生によるそのような活動は意義深い。

その他中国の文化をテーマとしているサークルに参加していた。一つに中国文化を生身で体験したかったことが理由としてあるが、同時に国際交流や積極的に外部と関わる類の活動にはあまり関わらない学生と交流してみたいとも思ったことも大きい。

・太極拳サークル

初心者は週二回2時間程度の練習を行う。他の用事がない限り毎週参加し、基本動作は一通り練習した。ただ習得は全くしていない。熟練の学生が丁寧に教えてくれたため、非常に楽しく活動することが出来た。また、「気」という漠然としたものの正体に少し近づけたように思う。

・禅サークル

毎朝禅を行っているサークルだが、私は実はそれには参加していない。単発で北京郊外にある寺への小旅行へ同行した。中国において必ずしも多くはない仏教を信仰する学生とともに、仏塔の周りを周回しながらお参りするなど濃密な訪問であった。どのように仏教を信仰するに至ったかという質問に対し、暮らしていく中で仏教に関する思想に触れそれを理解して内面化していくことがすでに仏教を信仰することに繋がる、とある学生に答えられたのは印象的であった。

・中国茶同好会・中国茶サークルの立ち上げへ

中国茶サークルは週に1回集まって、卓を囲み談笑しながら中国茶を味わう活動を行う。無類の中国茶好きとしてはまたとない機会であった。ここから刺激を受け、北京大に東大から留学している別の、中国茶が好きな学生と中国茶同好会を東大に作るという計画をするに至った。このサークルは既に登録を完了しており、秋から本格的に活動を行う予定である。私は来学期は北京大から茶葉調達や北京大の中国茶サークルとの橋渡し等を行う。

北京での活動

・日本人コミュニティ

北京は一時よりは減少したとはいえ、日本人が多く住む都市である。役所関係、企業、医療、学生と属性もさまざまである。その中で様々な県人会や趣味等を媒介とした集まりがある。社会人と学生の交流会もある。一方で北京大学には日本人会も存在し、日本文化のイベントの企画等を実施していた。私もこのような集まりのいくつかに参加し、北京で長年暮らし働く人のお話が聞けたことは貴重であった。また、北京大学に所属する日本人の大半は両親のいずれかが中国人であったが、彼らの中には日中英三か国語を使いこなし、日中関係の発展に寄与したいと志す人がいるなど、刺激的な出会いであった。また、いくつかの大企業のトップや大使館勤務の職員の方の中に、自身の高校の出身者がいた。決して御三家といったレベルの高校ではない中で、高校の大先輩方に多数巡り合うことが出来たのは幸運であった。

・体験活動プログラム

3月に北京の企業を訪問するという、体験活動プログラムに参加した。日本から10人ほどがやってきた。中関村のベンチャー企業、中国新興企業、銀行、大使館等を訪問した。何の地縁もない北京で半年留学しただけでは会えない方々のお話を伺え、中国における現在の一端を知りえた。一方大使館では中国大使との対談会が1時間ほど設けられ、外務省に入省後中国と長年携わり、3か国語を操る対中外交の中核にいる人物の気概に触れ、その知遇を得たことは、政治学・国際関係に関心のあるものとして僥倖であった。大使は、長年中国で暮らし、中国と関わる中で、「ある事柄に対して中国人がどう反応するか、大体予測がつく」、と言い切り、語学にも堪能で、自他ともに認める中国通である。自身は中国に留学し、将来何をを目指しているのか、再考する契機となった。

・博物館、戦争

北京は首都として国家級の博物館が集積している。ただなぜか1、2の博物館を除いてあまり訪れることが出来なかった。ぜひ来学期以降じっくり見ていきたいと考える。一方北京の南西の郊外にはかの有名な盧溝橋がある。中国大陸で残虐な行為を繰り返した日本軍の描写とともに目立ったのは、いかに国民党に対して共産党が抗日戦争の勝利に大きな貢献

をしたかというストーリー構成であった。展示室最後の部屋には平和への願いや、共産党歴代指導者の平和への貢献が示される。現体制化の下で中国視点から見た戦争の歴史を体感した。

・京劇

共に留学へ行っていた友人を介して、北京戏曲评论学会の方々にお世話になった。学会の方のご好意で、幾度にもわたり京劇を鑑賞し、中国古典文化に親しむまたとない機会を得た。さらには裏側の控室にも入る機会を得て、役者さんらと間近で交流することが出来た。実際演壇の両脇に字幕は出るとはいえ、あらずじを具に追うことは非常に困難である。果たして学会の方の解説も受けつつ、見所に目をやり、そして役者の繊細かつ渾身の演技に見入る中で、中国文化、中国人の生活の要素が詰まっていると言われる京劇の機微を少しでも読み取れたであろうか。

加えて、学会の会長であり、東大にも籍を置く斬飛氏には、複数回ご自宅にお招きいただき、日中文化の差や古典文化を研究する意義等、時には明け方まで語り合ってしまった。ここで話し合ってしまった、人生や文化に対する見方は一生の財産となり得るものである。

・ LGBT、裁判所等々

北京滞在中には、観光ではなかなか訪れない、いわば社会科見学的なことも多くした。中国で最大の性的マイノリティ者が交流するサイトの運営会社を訪問し、一人っ子政策、政府からのサイバー上の監視に伴うプライバシーの問題等々中国特有の LGBT の課題が存在することを伺った。

一方法学徒として裁判所を訪問した。法律や裁判の形態は大陸法系で日本からも影響を受ける中、一見日本の裁判所と変わらない。裁判の起こし方、信訪制度等々細かい制度上の差を学んだ。また、裁判官になることは決して給料的にもいい仕事ではないが、都市戸籍をとる手段たり得るため、最初の仕事として裁判官を選ぶ傾向もあるという話は、行政から大きな影響も受ける中国法システムに対するの複雑さを再認識させられた。

北京外への旅行

留学期間中上手く休みを見つけて4回、北京の外へと旅行へ出かけた。なるべくコストを抑えるためユースホテルや寝台列車を利用していた。旅行記になることは避けたいので目的と特筆すべき点について簡潔に述べる。

・天津

北京から高速鉄道で 30 分の近さで、中国国内でも際立った成長を見せる。街はあちこちで工事が行われていた。明代の町並みが残る地区等の観光の他、南开大学と天津大学のキャンパスを友人の友人である学生に案内してもらった。時間的制約で行けなかったが、次回機会があれば港湾地区や新興の金融街へも足を運びたいと思う。

・南京

昨年にも訪れていたが改めて南京を訪問した。南京大虐殺記念館を訪問すると、昨年より展示がより充実していた。(市)政府が力を入れていると思われる。大好物の鴨血粉丝でお腹を満たすことは忘れなかった。

・大連、旅順、青島

昨年から知り合っていた北京大の友人と二人で出かけた。遼東半島から山東半島へ渤海をフェリーで渡るルートをとる。日露戦争の激戦地である旅順、中国海軍の要衝であり旧ドイツ植民地である青島を訪れ 20 世紀初頭の中国の遺産を見学したいと考えた(威海にある日清戦争博物館は悪天候により訪問できなかった)。旅順は小説とドラマで見て長年訪れたかった土地である。大連と青島は内陸である北京とは異なり港町として発展しており、町の雰囲気も食文化も異なる。また植民地時代の建物が残り、それが受容され観光地化しているのは印象的であった。

・新疆

記憶に残る初めて触れた中国国内事情に関するニュースは、北京オリンピックと、そして同時期の新疆での混乱である。近年は以前より安定化はしたが、少数民族の立ち位置は改善されたとは言えない。また、新疆は一带一路構想の重要な拠点である。この目で見たいと考えた。

北京から寝台列車に乗ること 30 時間で着くウルムチは、既に漢族が過半を占め、再開発により大半の地区では往時の雰囲気を偲ぶことは出来ないが、それでもウイグル族ら少数民族の文化が息づいている街であることを感じさせた。ただ北京の何倍も多い交番と警察官は多くを物語っていた。

さらにイリ条約で有名なイリ地方へ赴き、賽里木湖へ訪問後、カザフスタンとの国境を訪れた。大きな操車場があり、国境沿いには自由貿易区が設置され、まさに建設ラッシュであったが中国の各地で近年見られるのと同様に、一見したところゴーストタウンと化していた。今後の一带一路政策の変化次第である。

後日、中国人の友人らに新疆に一人で行った話をする、一様に驚いた顔をした。大半の友人は一度も訪れたことはなく、決まって安全だったか、と聞いてくる。広大な中国の中で、

東部に住む一般の中国人がもつ、新疆に対する見方を垣間見ることとなった。

一带一路という軸

『一带一路は素晴らしい！見てくれ、この鉄道はヨーロッパまで繋がっているんだ！』。中国とカザフスタンとの国境の町、ホルゴス。あるタクシー運転手は、何十両とも連なった貨物が、晴天の下ゆっくりと通り過ぎるのを指さしながら嬉しそうに説明してくれた。

このような最前線における肌感覚での経験から、AIIB 本部への訪問、一带一路に関する講義の受講、中アフリカ会議への参加、その他あらゆるイベントや言説にビルトインされた「一带一路」まで、現地だからこそ得られる経験を重ねた。この政策は何なのか。「人類共同体」というスローガンも掲げつつ積極的な外交政策へ乗り出した中国を覗こうとした。このことについては1年が終わった段階で総括したい。

来学期に向けて

以上、3か月半中国・北京での留学生活について述べた。そして私は来学期の留学延長に応募し選考を経て、その機会を得ることが出来た。延長に至った動機と来学期の抱負等につき簡単に述べたい。

・学習対象

既に触れたように前セメスターは中華人民共和国建設以降の中国の国際的立ち位置について多角的に(悪く言えば広く浅く)学ぼうとした。歴史的には建国から今に至るまで、国際関係の観点からは対外関係、超大国としての台頭の過程と一带一路、そして経済的観点からは改革開放移行の政策や企業活動の実態についてである。

次のセメスターではもう少し時間を後ろへと伸ばし、対象を内部へ絞りより中国政治・文化に迫っていきたいと考える。習近平による憲法改正・中国学生との議論・国際関係や歴史の講義を経て、中国が悪というわけではなく、厳然とした中国独自の論理構造を知り、正しさの衝突とでもいうべきものに多く直面した。中国内政のありかた、思想的整合性の取り方等によりフォーカスしていく。そのためにも中国古代思想や固有法、政治思想の原点にあるものを講義や独学で深めてゆきたい。これを通じ、中国の文脈や内部事情を踏まえた分析、西洋発の政治思想に対するより多角的な洞察、中国文化が通底する日本に対するより深い理解をしていく一助になればと思う。このことは、将来中国人と何かをするときに、より広い視野に立って物事を考えられることに繋がると思う。

・その他の活動

また、反貧困協会や LGBT を扱う会社での先学期での経験は、現地に行くことでしか体感できないリアルで内的な中国接する機会をもたらした。このようなキャンパスの外で中国を見つめる機会を増やしたい。留学期間終了後等にインターンをするのも一つの手であろう。

さらに、北京大生の多くは、今後の中国社会の中核をなしていく集団である。講義やクラブ活動の場等を通じて積極的に彼らと関わってゆく。この点来学期は、中国人の北京大生と同じ部屋に住むという稀有な経験をすることになるから、その機会を十二分に活かしたい。春節に帰郷に付き添えたら、とも思う。

先学期には多くの中国人に会った。ウィチャットの友達の数には 200 人以上増えたことからその一端が伺える。その中で彼らの出身地は多岐渡った。まだまだ中国(・香港・台湾)にはたくさん訪れたことのない土地がある。来学期は西安、四川省、深圳・香港等を訪れることを目論んでいる。それぞれの土地の暮らしや歴史を見てゆきたい。

そして無論、先学期から引き続き一带一路といった中国の政策を内面から見ていくことに努め、同時に中国経済をこの身で体験していく。そのためにも、現地中国企業でインターンする機会を得られたらと考えている。

中国語については、よりアクティブに中国語を学ぶことができきてきている中で、積極的に友人らと会話を行い、基礎的能力の向上に努めたい。そしてより実践的な中国語力を高め、HSK 等の形でそれを証明できるようにする。また、先学期とは異なり、次のセメスターは中国語の講義に出ることを計画している。

末筆になるが、まずは半年間サポートしてくださったすべての方に厚く感謝の意を表したい。